

近世長崎の学問
—海外の蛮舶輻湊する所—

パリ大学

サイジ・モンテイロ ダニエル

Daniel SAID MONTEIRO

近世日本における長崎市は特別な位置を占めていた。厳重な「土農工商」の社会秩序に基づいた江戸幕府直轄領地でありながら、交代する長崎奉行以外、当地の管理人はほぼ町人だった。海外交易の関係が深く、和漢洋の文化を融合したところともいえ、当時の言葉で換言すれば、江戸時代の長崎は「海外の蛮舶輻湊する所」であった。

江戸初期の十七世紀において、幕府は国際貿易を制限し、長崎港はいわゆる「四つの口」として指定された。中国のみならず、台湾、東南アジア諸国からの「唐船」も、そしてオランダ東インド会社の「紅毛人」も通商の目的で来航していた。商船にもたらされた多様な品々に加え、漢洋の書物や地図もあり、口頭の情報交換もあったため、長崎は知識ネットワークの重要拠点だった。ただ、外来の情報と知識は対等ではなく、「華夷」思想という枠組みで分別された。つまり、「中華」であり古代聖人の智慧を有する中国の文化は、「外夷」ヨーロッパの知識に勝るという前提があった。

しかし、1644年に中国の統治が明代から清代へ変遷し、東アジアに大きな衝撃を与えた。朝鮮や日本などでは、北部の韃靼（満州族）が唐土を征服し、中国は「華」から「夷」へ変貌したとみなされた。長崎でも古来明風の「唐人」が長崎に来なくなり、唐船の商人は皆

「北狄韃靼」の姿で現れた。また、江戸幕府の視点からみれば、唐船に乗っているヒトとモノ（特に書籍）は厳禁された「耶蘇の邪宗」（キリスト教）を拡大させる脅威もあった。たとえ中国が完全に「夷」の国ではなかったとしても、明らかに「夷」であるイエズス会の宣教師が未だに大陸の各所で活躍していたため、彼らの書物などを通じて日本の人々が改宗し、世間を騒がせる恐れがあるという見解であった。

本報告は、十七世紀の政治情勢が一変した東アジアの中の長崎学問を紹介する。長崎聖堂という文廟に着目し、江戸幕府と長崎学者とキリスト教からの脅威との関係を再考し、唐人と紅毛人が持参したモノ・知識と当地学者への影響、またその反応を検討する。